

SMS におけるフランス語の文体的特徴

松田 里沙

1. はじめに

インターネットの発達によって新たなコミュニケーションの「場」が生まれ、さまざまな媒体を通して時間や空間に左右されることなくオンラインで人と人がつながることができるようになった。コミュニケーションとして行われる言語交換は「場」によって異なる特徴を持ちうるが、コンピュータを介したものにおいてもそれは同じである。つまり、インターネットコミュニケーションで現れる文体には、これまでの現実世界での「場」におけるコミュニケーションで現れていた文体とは異なる、独特の現象が見られる。本稿では SMS (Short Message Service) で現れる文体を分析し、その特徴を明らかにすることを目的とする。

2. SMS について

SMS は媒体の特徴として、書き手（発信者）と読み手（受信者）が個人であること、携帯電話のネットワークを用いること、時間・空間的に自由であることが挙げられる。また、メールとは違って短い文を短時間でやり取りすることから、Anis (2003) は SMS について「バーチャルな同時性 (une synchronicité¹ virtuelle)」を持つと述べている。

このような同時性や話者間の距離の喪失は、対面、書面といった元来のコミュニケーションの場との差異を一層強める。そういったインターネット上のコミュニケーションの場が、話し言葉とも書き言葉とも取れないような文体を表出していると考えられる。

3. 先行研究におけるインターネット上の言葉の位相の捉え方

これまでのインターネットを介して伝達される電子的談話 (discours électronique médié) の研究では、話し言葉と書き言葉の両方との関連性を結び付ける傾向がある。

(1) jv ché André pour diné

(Fairon 他 2006)

上記の例を発音に注目して書き言葉に直すと以下のようなになる。

(1') Je vais chez André pour diner.

正書法通りに書くならば様々な形を使い分ける必要があるが、話し言葉のように音声で捉えると、同じ発音になる ez、er を é と置き換えられ、また Je vais の読まない部分や文脈で判

¹ ソシユールのいう synchronicité は「共時性」と訳されるが、ここではある時点を発信者と受信者が共有しているという意味で使われているため、「同時性」とした。

断できる部分を落とすことができる。このような捉え方をすることで文字数を減らし複雑さを回避している。Pierozak (2003) はこの新たなつづり字の形式を「間違い・非正書法」「タイピングミス・アクセント記号の削除」「オノマトペ・顔文字」「音声表記・省略」の4つのカテゴリーに分類し、前者の2つを非正書法 (non-orthographique)、後者の2つを周辺の正書法 (péri-orthographique) としている。この分類は正書法に当てはまらないものをすべて一括りにせず、その変形が意図的であるかどうかを明確に示すため、つづり字が変化しているものを単純に誤用とはせず、語の進化過程と捉えることができる。

しかし先行研究において、SMS に現れる言語表現という文字レベルでの研究はあるものの SMS メッセージ全体、つまり文レベルでの検討はあまりなされていない。そこで本稿では、言語表現だけでなく文について分析も同時に行い、文字と文の関係性から SMS の文体的特徴を導く。

4. SMS の文体的分析

SMS の文体的特徴として略語化、文の数、複文の3点に着目して分析していく。今回分析するコーパスは全て sud4science² が公開している SMS コーパスを使用し、以下に挙げる例はそこからの引用である。

4.1. 略語化

ここで言う省略とは、話題や内容を省略する談話省略ではなく文字を省略する現象を指す。先述した Pierozak による4つ目の「音声表記・省略」について、省略現象の中でも更に以下の3つに分類した。

4.1.1. 簡略化・略号

- (2) Ah ok ! Passe lui le <bonjour>bjr :) bonne soirée
- (3) Aller <t'inquiète pas>tkt ! Je dirai rien si tu <veux>vx
- (4) merci <pour>pr la soirée d'hier soir, ct <vraiment>vrmt cool!

簡略される語は名詞が最も多く、熟語や副詞など品詞に関係なく現れた。もっとも現れにくかったのは動詞で、読まない語尾が落ちることはあっても活用語尾が落ちている例や中間部の文字が落ちる例は稀であった。

変化の仕方は母音を落とすタイプ（下直線）と単語の後半部分をすべて落とすタイプ（下波線）がある。

² L'université catholique de Louvain の研究センター CENTRAL が行っている sms4science の派生プロジェクト (<http://www.sud4science.org>)。sud4science は L'université Paul-Valéry Montpellier 3 によって作成されたフランス語版コーパスである。コーパスは 2011 年に収集されたものであるため、分析もその時点における言語表現に限るものとする。

- (5) J'aime bien il est vraiment gentil. Merci de m'avoir invitée à ton <anniversaire>anniv :-)
- (6) <Salut>Sl tu es <disponible>dispo demain matin pour un squash ou début <d'après-midi>d'aprem ?

コーパス全体で見ると前者のタイプがほとんどを占めており、後者のタイプの省略をする語は長い単語のみといったように例外的であった。また、後者は省略される位置が一定であることから、後者の省略は省略された形がすでに単語として認識されていると言える。

このような簡略化は長い語を短くするために行われると考えられたが、長さだけが簡略化の条件であるとは言えない。そうでなければ、(4) *vraiment* の簡略形が 4 文字となるのに、(3) *veux* や (4) *pour* といった 4 文字の語も簡略されることを説明することができない。

- (7) Oui ben ça va si c'est le cas jprendrai la responsabilité pour le gpe, jai du quitter mtp en train smatin a la derniere minute, je px pa etr dan 2 endroi a la fois, et dsl mai javai pu de baterie dc pa tn numero

(7) の動詞、助動詞を見ると、助動詞 *peux* だけが簡略されており、そのほかの *prendrai*、*quitter* といった明らかに長いと感じられる動詞は簡略されていない。またほかの語もいくつか簡略化・省略されていることから、本動詞を簡略化することを避けていると言える。これは簡略化した語が対話者間において共通の理解が得られないと判断されたために避けられたと考えられる。一方 *peux* のような助動詞は、会話において使用される頻度が高く、またフランス語において助動詞の数が少ないため、簡略されていても復元が容易である。同様の理由で、(3) *veux* も頻出する上に *si tu veux* として定型化しているため、復元されやすいと考えられる。以上から、語の簡略化には語の長さではなく使用頻度が関係していると言える。

4.1.2. 発音に準じた変形による略語化

(1) のように同じ音を持つ語や文字に置き換えて字数を短縮しているもので、一見まったく異なる変化をしているが音声的には同じ語となるものをここに分類する。

- (4') <c'était>ct vrmt cool!

- (8) Coucou <maman>man tu <sais>c <quoi>koi <aujourd'hui>ojourdhui <j'ai>g <été>eté a la riviere <j'ai>g pris de <trop>tro belle <photo>foto. Tu <verras>vera ce soir. Et <c'était>cetai pour te dire <que>ke tu <t'inquiète>tinkiete pas je rentre ce soir pour <manger>mangé. <Bisou>Bizou

- (9) <Tu es→T'es>T libre demain?

音声と関連しない簡略化では名詞が最もされやすかったのに対し、ここでは主語+動詞の短縮形や関係詞を変形したものが多く現れた。逆に名詞でこの変形が行われるものは少なく、特に固有名詞では見られなかった。このタイプの変形は他の略語化と比べて特に視覚的にも書き言葉らしくなく、SMS 特有の文体として先行研究で取り上げられることが多い (cf. Gudrun & Méliissa (2007) 、Panckhurst (2009) 他) 。文字数を減らすことよりも発音に重点を置き、結果として同じ音であればよいという考え方から、変形に多様性があることも特徴の一つである。また多様性について van Compernelle & Williams (2007, p.65) の研究で、対話の環境や話者間の関係性が強く影響すると述べている。SMS のように個人間で対話するものは、開かれたものよりも親密性が強い。実際に、これらの変形は相手に対して「tu」と呼ぶ文面で起こることが多かった。つまり、語を変形させることで語を省略させるだけでなく、メッセージ上にくだけた雰囲気を作り、書き言葉で表されるような形式的な環境を排除することで話者間の親密さを示している。そのような相手との距離感が略語化という現象からも読み取ることができる。

4.1.3. 文法的形態素の脱落・変形

上記 2 タイプとは異なり、単語の文字数を減らすのではなく、単語を省略、または変形させてしまうものがある。

(10) <Il>Faut qu'on se voit !! Vous habitez ou ?

(11) <Il>Y me semble qu'aujourd'hui c'est une journée exceptionnelle... non je <ne>parle pas du soleil xD

(12) <Je>Suis assise chez quick

この形式の省略は主語、否定辞に多く見られ、省略されたものが誰でも推測できるという共通点がある。

主語の省略は非人称が最もされやすい傾向があった。他の人称では、(6) のように主語+動詞をまとめて変形してしまう例が多いため、省略する例は非人称ほど多くは見られなかったものの、一人称では (9) のような例も観察された。(9) は後続する *suis assise* から、この活用を持つ人称は *je* しか考えられないため、発信者と受信者が共通認識を持つことができるという談話省略の定義 (久野 1978) が当てはまる。しかしこのように、省略されても補えるからといって、全ての人称にそれが当てはまるとは言い切れない。実際、二人称、三人称の主語省略はこのコーパスでは観察されず、一人称でも主語省略が起こったのは単数のみであった。そのため、活用によって主語を推測できるから省略しているのではなく、自分に関することや誰とも関係しない非人称という他人に影響しないものが省略されやすいと考えられる。

以上の分析から、略語化される条件として「語の使用頻度」「受信者によって推測可能か」「受信者との親密さ」の 3 点があると考えられる。使用頻度が高い語ほど、使われる場面や

それを理解できる人が増えるため、更に略語化した語が使われやすくなる。そうした過程から、ついには一つの語として認められていくといった場合もある。先述した簡略化もこの変化に対応したものであると考えられる。こうした流れは話し言葉や書き言葉の中でも見られる現象であり (Frei 1929)、誤用ではなく SMS の文体として捉えられていると言える。

4.2. メッセージを構成する文の数

SMS の特性から考えると、SMS でやり取りされる文は短く簡潔であることが望まれる。実際、単語～2 文が大半を占めており、文が長くなるにつれてその割合が減っていることがわかる。収集したコーパスでの結果を以下の表 1 に示す。

表 1 メッセージ全体の文の数の内訳(1524 例)

文の数	メッセージ数	文	メッセージ数
非動詞文	245	3	146
1	664	4	71
2	342	5～	56

表中の非動詞文には、名詞文、返答 (ok, oui など)、疑問詞、記号 (顔文字)、挨拶が含まれる。しかし、一般的に非動詞文と呼ばれるような文は一部であり、記号のみや相槌のみといった意味を成さないメッセージも含まれるため、すべてがメッセージ単独で意味を持つとは言えない。挨拶以外の非動詞文メッセージの情報は、他の文数のメッセージよりも特に対話者とのやり取りに依存しており、本来ならば文として成立させるために必要な文法やその情報に付随する他の情報を落としてしまう。

(13) Rdv 15h au parc.

(14) Coucou! C tjrs ok pr rdv demain 10h au parking tournant? Si changement de programme, fais moi signe! Bonne soirée, bisous

同じような SMS メッセージでも、(13) と (14) を比較すると明らかに情報量に違いがある。(14) は他者が見ても発信者の意図や伝達したい内容がはっきりとわかるのに対して、(13) は発信者がこのメッセージで伝えたいの ”15h au parc” のみであって、他の情報は受信者とのそれまでのやり取りに依存する。そのため (13) のようなメッセージは、相手とともに情報を確立していくものであると言える。一方 (14) は一つのメッセージで複数の情報を伝えることから、このメッセージ自体には相手との関連性は見られない。加えて表 1 で見られる非動詞文の使用度の高さから、SMS におけるコミュニケーションは、お互いの情報を受けながらコミュニケーションを進めていく対話形式が用いられやすいと言える。

また 1 文～3 文のものを見ると、文頭を大文字にする、ピリオドを打つといった正書法に

よる一文の区別が明確にされておらず、文として分けるべきか不明瞭なものの方が多く現れた。しかし4文以上になると、文の区別がはっきりとわかるようになり、書き言葉的な正書法に則っているものが多くなる。以上のことから、メッセージの長さによって書き言葉的な性格の現れ方が異なり、短いものだとそのような性格が薄れるということがわかる。

次に、2文以上のメッセージにおいて3.1.で見た省略の出現傾向について分析する。3.1.において分類した省略の形態で、それぞれ *salut*、*anniversaire*、*pourquoi*、*il faut* を例に抽出した。その結果を以下に示す。

4.1.1. 母音を落とすタイプ

	1文	2文	3文	6文	7文
Salut	0	2	4	2	2
Slt	3	1	0	0	0

4.1.1. 後半を省略するタイプ

	非動詞文	1文	4文	5文	7文
anniversaire	1	0	1	0	1
anniv	0	2	0	1	0
annif	0	3	1	0	0

4.1.2.

	非動詞文	1文	2文	3文	5文	6文
pourquoi	1	2	2	3	1	1
pk	2	1	3	0	0	0

4.1.3.

	1文	2文	3文	4文	5文	7文	9文
il faut	1	3	4	1	1	0	1
faut	3	2	1	3	0	1	0

いずれの省略でも、省略前の語は文数の多いメッセージに現れ、省略後の語は文数の短いメッセージに現れやすい傾向があることがわかる。これは短いメッセージをさらに短くしようとする意図のほか、長いメッセージはSMSというよりメールのように扱われるため、SMS特有の言葉である省略語は使用されにくくなると考えられる。したがって、メッセージの長さによってSMSをどのように扱うかが異なり、省略はSMS特有の、短いメッセージの対話形式のやり取りにおいて起こりやすくなる。SMSは短いメッセージが好まれるため、語を短

くする略語化は受け入れられやすかったのではないかと考えられる。

4.3. 単文か複文か

ここまで SMS では発信者は文を意図的に短くしていると述べたが、それは文構造にも影響しているのだろうか。メッセージの長さ、つまり文の数を減らすためには接続詞や関係詞によって複文にすることで可能となるが、文自体を短くするには複文化は逆効果となる。そこで、複文による文の複雑さに焦点を当て、3.2.で1文以上4文以下に分類された1223例の文構造を等位と従属の観点から観察する。

4.3.1. 等位

まず、一文中に2節以上の等位関係を持つメッセージについて分析する。等位関係を持つメッセージには、接続詞によって関係づけられる等位 (coordination) と、接続詞がなくただ節を並べられる並置 (juxtaposition) がある。

(15) G repris vendredi et ouai c bien <mais>ms il va y avoir pas mal de boulot a mon avis!

(16) C'est bon, j'ai envoyé la lettre lol

実際のコーパスでは複文化されたメッセージはどういった割合で出現するのか、文の数別の等位接続詞の生起回数と、並列された文を含むメッセージの生起回数を以下の表2に示す。

表2 メッセージ全体の文の数と等位接続詞の生起回数の割合³

文の数 等位接続詞	1文	2文	3文	4文	計
0(単文)	565(85%)	257(75%)	103(71%)	48(68%)	973(80%)
1	79(12%)	69(20%)	30(21%)	12(17%)	190(16%)
2	16(2%)	14(4%)	8(5%)	9(13%)	47(4%)
3	4(0.6%)	1(0.2%)	5(3%)	1(1%)	11(0.9%)
5	0	1(0.2%)	0	1(1%)	2(0.1%)
計	664	342	146	71	1223
並置	75	22	8	2	106

上の結果から、メッセージの長さに関わらず単文がほぼ全体を占めていることがわかる。また1文からなるメッセージと2文以上のメッセージを比べると、1文のメッセージは特に

³ 割り切れない場合の小数点以下の処置は、正数の場合は小数第一位以下を四捨五入、少数の場合は少数第二位以下を四捨五入した。なお後述する表4も同様の処置を行う。

複文が少なく、割合では 1 文と 2 文のメッセージの間の差が最も大きく、2 文以上のメッセージ間の差はほとんどない。このことから、等位接続詞は SMS において生起ににくい、生起するのは 2 文以上のメッセージにおいてであると言える。

しかし、接続詞を持たない並列の生起について見ると、1 文からなるメッセージにおいて等位接続詞が共起する例よりも多い。書き言葉において並列が行われる場合、「,」が間に置かれるが、SMS においては「,」もなく、ただ節が並べられている場合もある。

(17) ça c'est sur tkt c'est largement jouable ne te panique pas

上記の例は句読法による文の区別がされておらず、表面上は 1 文のように見られるが内容は明らかに複数の節を含んでおり、以下のように分析することができる。

(17') ça c'est sur/ tkt/ c'est largement jouable/ (donc) ne te panique pas

以上の分析から、並列に分類されているものの中には、等位接続詞の有無による文意の違いを示しているのではなく、接続詞を省略しているものも含まれていると言える。(17') のように文脈によって接続詞を補うことができることから、3.1.の略語化同様、送信者は受信者が省略された語の推測が可能であることを見越して省略していると考えられる。

また同様の等位接続詞を使用していても、(15) のような接続とは異なる意味を持つ場合がある。たとえば以下のような例である。

(18) Et on se retrouve <où>ou a quelle heure?

(19) <Non>Nan mais c'est pas pareil c'est pas <ça>sa

(18) の例は前の文やメッセージに対して付加的情報を与えるためにつけられたもので、1 つのメッセージ内において 2 つ以上の文や節が等位関係にあるわけではない。また、(19) は「non」を強調するためのもので、これもまた文と文を等位接続しているものではない。このような接続以外の意味機能を持つ等位接続詞の生起が SMS の中でよく観察される。このコーパスには、付加には et、mais、donc、強意には mais、donc の出現が見られた。メッセージを構成する文の数との関連を見るため、以下の表 3 に意味的分類ごとの等位接続詞の生起回数をまとめた。

表3 意味的分類ごとの等位接続詞の生起回数

文の数 意味的分類	1文	2文	3文	4文	計
付加 et/mais/donc	26	26	17	8	77
強意 mais/donc	14	4	4	0	21

付加として等位接続詞を用いているメッセージは、1文のメッセージに最も多く生起し、文数が増えるにつれてその出現が減っていることがわかる。付加の文は、それより前に行われた発話を補うためのものであり、その発話で与えられる情報は何かその前の情報に対して付加的であるような単独では完結していない文である。こうした発話が1文のメッセージにより多く現れていることから、文数の少ないメッセージは文数の多いメッセージに対して未完結で、ほかのメッセージの情報に依存していることが多いと言える。

また non (nan) mais が1文のメッセージにもっともよく出てきやすく、2文以上では出現しなくなる傾向がある。この意味での mais は口語的な表現であり、文の数が少ないメッセージに集中して生起していることから、口語的表現が書き言葉的な性格が弱いメッセージに現れやすい傾向と一致する。

4.3.2. 従属

次に、従属節でつながれた複文について分析する。一つのメッセージにつき従属節が生起した数を以下の表3に示す。

表3 メッセージ全体の文の数と従属節の生起回数の割合

文の数 従属節の数	1文	2文	3文	4文	計
0(単文)	532(80%)	241(70%)	80(55%)	31(44%)	884(72%)
1	104(15%)	75(22%)	41(28%)	20(28%)	240(20%)
2	28(4%)	15(4%)	19(13%)	11(15%)	73(6%)
3	4(0.6%)	4(1%)	4(3%)	5(7%)	17(1%)
4	1(0.1%)	1(0.2%)	1(0.7%)	2(3%)	5(0.4%)
5	0	0	1(0.7%)	0	1(0.1%)
6	0	1(0.2%)	0	1(1%)	2(0.2%)
9	0	0	0	1(1%)	1(0.1%)
計	664	342	146	71	1223

1文、2文のメッセージでは単文のみの構成が70~80%と全体の大半を占めていたが、3文のメッセージでは55%、4文のメッセージでは44%と約半数に減っており、複文の占める割合がメッセージの長さに伴って多くなっていることがわかる。また従属節の数を見ても、いずれの数でも長いメッセージになるほど、生起回数の割合が高くなる。この結果から、メッセージの長さと同義的複雑性は比例関係にあると言える。

しかし全体を通して、いずれの文数においても従属節を持たない単文のみの構造を持つメッセージが、割合として最も多く使用されていることも明らかである。そのため、長いメッセージを避けているのではなく、メッセージを構成する各文が長く複雑になることを避けていると考えられる。

等位と従属の生起を比較すると、従属の方がメッセージの長さと同義節の生起回数に比例関係ははっきりと見られ、メッセージの長さによる違いとの関連性が強いことがわかる。それに対し等位は、1文と2文以上の間のみ差があり、それ以上には差が現れていないことから、メッセージの長さがある程度長いことに加えて、メッセージ内に含まれる話題が問題となっていると言える。つまり、等位に関しては接続詞の生起という表面上の分析だけでなく、話の内容についても言及する必要がある。

5. 考察

全体の分析を通して、SMSを介したコミュニケーションの場における文体的特徴は、簡略化と平易さにある。文の長さや文構造を見ると、発信者が意図的にメッセージを短くしていることがわかる。SMSの強みである手軽さや対話の同時性を生かすために、簡略化を駆使した手法が用いられる。

この簡略化の意図は、送信者がただメッセージを打つ手間を省くためという理由のみで行われているのではない。語やメッセージの長さの問題ではなく、送信者と受信者の間における関係性が重要となる。簡略化や省略は、受信者が推測して語や文字を補うことができるということを予期した上で行っている。SMSに頻繁に使われる語が簡略化されやすい、複雑な子細な文は用いられないなどといった現象は、送信者が判断する受信者の間における情報共有の度合によって起こるものである。

しかし、相手や用途を選べばいかなる語彙も省略・簡略化できるというわけではない。非動詞文では動詞が落ちているのに対して、文を構成するメッセージにおいて動詞は簡略されにくいことや、等位接続詞よりも従属節の方が省略されにくいことなど、SMSにおける最低限の伝達のための文法があるように思われる。

6. おわりに

本稿ではSMSの文体的特徴について3つの視点から分析した。先行研究では表現や語の簡略といった文字レベルでの分析がされているが、文体的特徴を明らかにするにはメッセージを構築する文全体のレベルでの分析も有用である。

しかし、インターネットを介したコミュニケーションの形態は多岐に渡るため、SMS の文体だけでは「インターネットコミュニケーションの文体的特徴」を述べることはできない。したがって、今後は SMS 以外の媒体によるコミュニケーションを見る必要がある。

参考文献

- 川島浩一郎 (2012) : 「名詞文と外心構造」『福岡大学研究論集 A 人文科学編』12(1), pp.43-49.
- 久野暲 (1978) : 『談話の文法』大修館書店.
- 佐藤健二 (2012) : 『ケータイ化する日本語 モバイル時代の「感じる」、「伝える」、「考える」』大修館書店.
- Anis, J. (1999) : *Internet, communication et langue français*, Paris, Hermès.
- (2003) : « Communication électronique scripturale et formes langagières : chat et SMS », *Rencontres Réseaux humains/réseaux technologiques*, 4, Université de Poitiers, [sur le Web : <https://www.mediensprache.net/archiv/pubs/2810.htm>]
- Crystal, D. (2001) : *Language and the Internet*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Fairon, C., Klein, J. R. & Paumier, S. (2006) : « Le langage SMS: révélateur d'1compétence », Didier, J.-J. et al. (éds) « *Le français m'a tuer* » *Actes du colloque "L'orthographe française à l'épreuve du supérieur"*, Cahiers du Cental, 1, Presse universitaire de Louvain, pp.33-42.
- Frei, H. (1929) : *La grammaire des fautes*, Genève, Kundig.
- Gudrun, L. & Méliissa, R. (2007) : « "jv me prendre un bois monumental the wood of the century g di". Langues en contact dans quatre corpus oraux et écrits "ordinaires" à la Réunion », *Glottopol : Revue de sociolinguistique en ligne*, 10, Université de Rouen, pp.86-100.
- Panckhurst, R. (2009) : « Short Message Service (SMS): typologie et problématiques futures », Arnavielle T. (coord.), *Polyphonies, pour Michelle Lanvin*, Université Paul-Valéry Montpellier 3, pp.33-52.
- Pierozak, I. (2003) : « "Le "français tchaté" : un objet à géométrie variable? », *Langage et société*, 104, pp. 123-144.
- van Compernelle, R. A. & Williams, L. (2007) : « De l'oral à l'électronique : la variation orthographique comme ressource sociostylistique et pragmatique dans le français électronique », *Glottopol : Revue de sociolinguistique en ligne*, 10, Université de Rouen, pp.56-69.

(まつだ りさ / 文芸言語専攻2年)